

第3期大和市多文化共生会議 第20回会議録(要約)

日時: 2014年12月20日(土)14:00~16:00

場所: 大和市役所分庁舎2階会議室

出席: 委員(新井政則、伊藤裕子、伊藤素美、岡崎チャーメン、宮嶋耕治) / ファシリテーター 清水睦美 / 大和市国際・男女共同参画課(船越英一、折笠穂子、水尾哲也) / 公益財団法人大和市国際化協会(小木曾明、紺野幹夫、田中弘子、小西永里子、石川和友) 以上14名

欠席: 委員(石間フロルデリサ、稲福スーザン、菊池健一、小林ホルヘ、ファン チイフォン、山田静娥)(敬称略)

1 報告書骨子について

報告書骨子を事務局から読み上げ、内容に関して委員から意見をもらった。指摘があった部分を修正し、国際化協会理事長に提出する運びとなった。

(報告書の変更について)

- 「外国人」と「外国人市民」という表現が混在している。
- 「外国人市民」と表記する場合、大和市を含む地域に住んでいる外国人という意味を含むものとし、一般的な対象としての「外国人」という表記と区別する。
- 報告書骨子のタイトル部分は「第3期大和市多文化共生会議 提案」とタイトルを変更する。

2 国際化協会理事長への報告書提出と会議の振り返り

岡崎委員長から国際化協会の小木曾理事長へ報告書を提出した。理事長から委員に対してお礼を申し上げた後、出席者から2年間の会議を振り返って感想を述べた。

(感想)

- 自分にも何かできることがあるかなと思い、この会議に参加した。大きな災害が起きたら何が必要なのか、自分がイメージしていたものと違っていたが、たくさん学ぶことができました。外国人の声を聴く場を作ってくれていることに感謝している。日本語が不十分なのでコミュニケーションがとれるか心配だったが、完璧な日本語でなくてもみんな真面目に聞いてくれるから、自分の意見を言うことができました。最初はなかなか言えなかったけれど、だんだんと言えるようになってきた。母国のフィリピンでは災害についてみんなが考えるということはないけれど、身近な人たちに災害対策のことを伝えていければと思う。

- 災害時にどのように情報を発信して外国人に情報を伝えればよいのかということが、いかにむずかしいかこの会議に参加して感じた。
- 会議の途中で「あ、そうなのか」と思うことが何度かあった。外国人を支援するんだという考えで始めたが、会議の委員から「自分たち外国人でも支援できるんですよ」ということを聞いて、なるほどそういうことなのか、外国人も支援する側になり得るんだと思った。外国人が安心して住める地域というようなランキングがあったら、大和市が上位に入るようになればいい。
- 60年ぐらいた大和市に住んでいる。ほとんどの外国人市民会議では、外国人委員のみだが、大和のような日本人でも参加できる多文化共生会議に協力することができて良かったと思う。自治会活動にも積極的に参加される岡崎さんに刺激をうけた。フィールドワークもとてもよかった。いろいろなテーマで多文化共生会議を継続させてほしい。
- フィールドワークで、この会議の外でもいろいろな外国人の声がきけてよかった。やさしい日本語をもっと外に発信できたらいいと思う。漢字にふりがなをふっただけというのではなく、外国人にわかりやすいものを発信できればと思う。
- 日本人と外国人が活発に意見を交わせるのか、心配しながら動いていた。やさしい日本語の概念をどこに組み入れたら、もっと広げられるのか、また訓練については、どうしたらもっと具体的になっていけるか、今後も考えることがたくさんあると思う。
- 提言をつくるということよりも、今回はこのように報告書をつくる形になった。多言語支援センターの訓練ができたことは良かった。情報提供のみの訓練だったが、今後は避難所をまわっての訓練などもできたらいいと思う。協会と一緒に取り組み、今年度中に協会との協定を進めていきたい。青山学院大学に新しくできる学部と国際交流のイベントや学習支援で連携がとれたらいいと考えている。多言語防災カードを作成していて、これが日頃から防災について考えるきっかけになってくれればと思う。来年度秋以降、第4期の開始を予定している。
- 日本人市民と外国人市民が同じテーブルについて、多文化共生のために話し合っていることが感じられた。多言語支援センターの運営訓練で大勢の方が集まったので驚いた。この訓練を一度で終わりでなく継続させていき、災害があったときにネットワークを活かしていけたらいいと考えている。

いじょう
以上